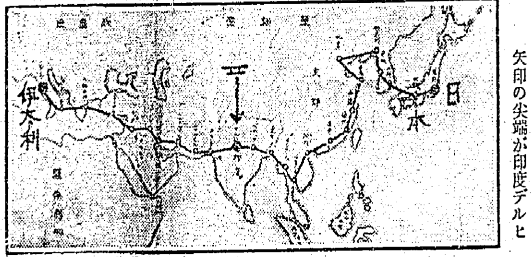
羅馬東京間飛行
美事旅程の半を突破
印度デルヒに到着せり
カプロニー一機は損傷サロニカに立往生
各機區々となり統一を缺く
（巴里特電三十一日發）

羅馬特電に曰くスカヴイニー、ボナルミー兩飛行家操縦のエスタフエツテ機はアダリヤよりアレッポに着せるもエッセンス無かりし爲數日滯在の後出發しバクダッド。バクソラ。カラチを經て無事印度デルヒに着き旅程の半分を濟ませりエルロニー。アッパ兩飛行家操縦のカプロニー三葉機は大損傷を受けサロニカに立往生しつゝありサラ。ボレルロ兩飛行家の三葉機は去る廿七日出發南伊太利なるジョージヤ・デル・コールに着陸其後出發せるや否や未だ不明なり各機區々となり統一の見込立たず數機の中孰れか日本に達し得ば良成績と云ふべし（巴里特電三十一日發）



大飛行到着地點
矢印の尖端が印度デルヒ

予は日本の美術と
愛國心を敬慕す
冒險飛行拋棄は遺憾
ダヌンチオ氏の談

ダヌンチオ氏は伊太利航空部長ペルリリー大佐に電報を寄せフユーメ問題今尚解決を告げざるを以て自ら羅馬東京間飛行に參加する能はず依つて目下フユーメに在るガルヂネツチ大尉を代人として選定せりと通告し尚ダヌンチオ氏は常に極東殊に日本の美術と愛國心とを見て嘆賞措く能はざるを以て日本を訪問せんとの希望を有し居たるに今や此の大冒險飛行參加を拋棄するの止むなきに至れるを深く憾とする旨を述べたり、ガルヂネツチ大尉は戰爭中ダヌンチオ氏と共に維納の上空を飛行したる飛行家の一人なるが大尉は同じく極東飛行に參加すべきグラダロ中尉を搭乘して目下フユーメより羅馬に向け飛行中なり極東飛行には右兩飛行家以外操縦者としてピリス、アンギロツト。フエルラリニ及コルテスの四中尉なる可し（國際羅馬二十八日發）

二月一日に出發
ダ氏代理のカルヂネツチ大尉

伊太利飛行將校の發表せる所に依れば羅馬東京飛行はダヌンチオ氏がフユーメ問題未解決の爲め斷然之を拋棄し代理としてカルヂネツチ大尉を選べるが右一行五機は二月一日羅馬を出發せる筈なり飛行機の上海に來るは十日前後なるべきが上海の着陸地點は江灣競馬場を豫定し南京路の競馬場と改むる事となるべし上海附近に來航の際は上海より一機を飛ばし着陸場まで案內する筈にて目下之が準備中なり到着後その中の數機は順路北京、朝鮮を經由東京に向ふ筈なるが他の數機は上海より目下上海滯在中の飛行將校の案內にて東京に直航する豫定なり（上海特電五日發）

ダンテ記念館を
東京に建設
大飛行に搭乘すべき下位春吉氏

伊太利詩聖ダンテの著作を日本語に飜譯する目的を以て千九百十五年伊太利に渡り目下ナポリ東洋語學校に教鞭を取りながらダンテの研究に從事しつゝある下位春吉氏は羅馬東京間飛行に搭乘參加すべき事既報の如くなるが今回自ら發起人となり東京にダンテ記念館を設立する計畫を立てたり此の記念館の建築考案は之を伊國著名の彫刻家ラフアイエル・ウクラ ゼ氏に依囑する筈にて館內にはダンテ圖書館と講堂を設くる事となれり土臺は全部日本產花崗石を以て敷詰め講堂入口の上部にはダンテの壯麗なる像を建て聖堂の欄には金文字を以てダンテの傑作の三節を刻みつけ建築物にはモザイクにて裝飾を施す筈なり

全縣下の警官と憲兵を集めて
警戒網を張れる八幡市
工場內に於る衝突頻々
檢束者四十餘名に上る

六日早朝より齋藤警察部長は各要所要所を見廻り八幡署及び製鐵所間に自動車を飛ばして警戒する樣に物々しきものあり縣下各警察署の應援巡査は旅裝を整へ續々八幡市に到着し八幡署長の指揮を俟つて各方面に出動、製鐵所構內には卅餘名を一隊とする警察隊數組を編成し工場より工場へと隊伍を組み練歩き警戒に努め其間私服巡査を配し不穩の形跡ある者は片端より檢束し八幡署に引致、同署樓上の會議室を檢束者控室とし司法行政の兩方面より取調を行ひ小倉檢事局より一色兒玉兩檢事出張し來り一々訊問取調を進め居れるが六日午後三時までに八幡署に檢束されたるは勞友會會長中原雄三を始め同會理事吉村與造、同山田榮藏、同北村三藏、同一九九六、同藤東年、同會計部長相原佐藏外各工場より實安榮一、辯人金詠文、金森寅次、鳥居直樹、伊藤嘉三郎、能美福一郎、松股繁、飯田由丸、安西利庄、有松正雄、猪々崎繁一、福住芳一、財井久三、大島金太郎、吉富國雄、須川源平、工藤勇雄、井上伊三郎、森重皆一、阪本史、藤田鏡介、仲宗一、笠木卓雄、池田庄七、黑野貞幹、神野金治、大石寛、德島綱、中氣繁六、西見繁六、岡本千太郎、外四五名都合四十三名拘引され居り八幡警察署は滿員の光景を呈せり因に勞友會副會長西田雄太郎（三十四年）は五日午後六時勞友會本部より八幡署に引致されんとする際素早く姿を晦し行方不明となりたり

喊聲を擧げて騷ぐ

六日午後九時頃一團の職工鯨波を揚げて熔鑛爐附近の高地に現はれたるが內部との交通を遮斷し居る爲鯨波の聲を揚げたるは何が故なるやを知らず之を聞きたる外部の職工及市民は何事か出來せしものかと取沙汰し居れり形勢は依然として尚不安なり

睨合の狀態

罷業職工側の要求案に對し七日午後六時何等かの回答あるべきものと職工側は一般に信じゐたるも當局にては中川次長を始め一齊に之を否認しつゝ七日と云へるは職工側の勝手に定めて期待し居れるものと稱しつゝあり大罷業も前途尚暗澹たる道程を取らんとす中川次長は語る

長官よりは事實の問合せありたるのみにて電報を以て報告したる事に對しては未だ何等の回答も來ないのみならず果して八幡に歸らないかも知れぬ、返事の來ない間は我々として施す術もない

職工中の過激分子
就業を阻害す
勞友會と同志會の反目

職工中過激分子は就業職工を罷業せしむべく隊を組み各工場を巡回し或は石を投じ或は脅迫して作業を妨ぐるより罷工の意思なき職工との間に三四の小衝突演ぜられしも憲兵警官の警戒嚴重なるため何れも大事に至らざりしが不穩の氣依然として濃ひ居れば製鐵所工場課にては竹下課長以下警官憲兵等と協力して警戒方に苦心し居れり

勞友會と全然立場を異にせる同志會幹部中には勞友會今回の擧に反對の意を見せる者少からず勞友會に對抗すべく演說會を開きて其の運動を阻止せんとの議出でしも斯くては却つて事態を險惡ならしむるの虞ありとて製鐵所當局に於て中止方を慫慂したれば一先づ中止するに至りたり勞友會及び其の他の過激分子中には六日夜密かに會合し七日午後六時の回答に對する態度を協議したり

友愛會の決議
拘束者解放と要求の貫徹

製鐵所罷工問題に就き六日夜八幡市に支部總會を開きたる友愛會は總會員五百名の內三百名出席し左の如き決議をなし五名の實行委員を擧げ同九時散會したり

一、同盟罷工に關し拘束者に對する處置は不當なりと認むるを以て速に拘束者を解放されたきことを七日午前齋藤福岡縣警察部長に面會して此目的の貫徹を遂ぐる事
一、齋藤警察部長の紹介を以て委員は八日中川製鐵所次長に面會し今回の職工の要求は合理的なるを以て即時之が要求に應ぜしむべく貫徹を期する事
一、會員は輕擧妄動を戒しめ勞友會と共に機宜の處置を執り目的を貫徹すること

▲實行委員 木村鎧吉、鈴木善五郎、藤田時次郎、瀨岡文六、柳田直一

『十七條は適用せず』
齋藤警察部長再び語る

福岡縣齋藤警察部長は六日午後更に語りて曰く

今回の擧に關しての取締に就ては現下問題となり居れる治安警察法第十七條の適用を見合せ唯聽取書により各警察署長の意見を纏め然る後知事に差出し公平なる裁斷を下したいと思ふ、萬一治警十七條を借りて適用して取締る場合には頗る氣の毒な經過をなすやも知れず將來の取締上に影響する所が多い事と信ずるから出來得る限り穩健な取締をしたい方針である、目下引致して居るものは單に嫌疑者として取調べて居るのだから如何なる罪名によるかは言明出來ぬが出張中の檢事も訊問して居るのでなく單に事情を聽取して居るに過ぎぬ

熔鑛爐の危險を
喰止めし田中組長
多數職工に亂打さる

五日午前八時同盟罷業により火を消し落したる製鐵所の大熔鑛爐は危くも其用を失はんとするに至りし際斯くと見たる組長田中熊太郎

平和の春を迎へて
『我々は互に眞に理解し合はねばならぬ』
五高教授グンデルト氏は語る

第五高等學校教授ウイルヘルム・グンデルト氏は日本に來てから十五年、五高に就職してから今年で既に五年になる、永い戰爭の間も『敵國人』と云ふ名の下に佗しい日を送つてゐたが、今度氏の財產に對する管理令も解除されて本當の平和の春が氏の上にも訪れて來た、氏は明快な日本語で將來といふやうな問題に就いて諄々と語る『日本と獨逸とは戰前に於て學問、工業其他種々の提攜を結んで了つた、此の提攜が戰爭の爲に絕えて了ふ事は遺憾で、平和の克復と共に之も亦復活せしめたいと思ふ、自分は政治上の事は全く知らないけれど、聯合國は正義人道、民主主義などを唱へて戰爭に對する國民の氣分を激勵した、聯合國の一部が果して正義とか人道とかに對し何程の誠意を有つてゐたか知らないけれど、獨逸にも亦正義人道を理想とする者は決して少くない又民主主義を理想とする者は今日の獨逸に於ても……